Road
to
Okayama

～2017年岡山インカレへの軌跡～

2016年鹿児島インカレに続いて、２年連続でインカレ出場
「日本一のロマンを求めて」
決して簡単ではなかった2017年岡山インカレへの道のり

確かに、理科大は他の大学よりも練習量は少ないかもしれない。
しかし、部員全員が日本一になるという強い思いがある。

激闘！！インカレ予選

2017年インカレ予選

インカレ予選は毎年５月の下旬に行われる関東学生選手権のことであり、上位４チームが本戦出場できる一発勝負のトーナメント制大会である。現在、関東地区からの本戦出場４枠をかけてⅠ部からⅢ部に所属している大学が総力をかけて激突する。

インカレ予選にはシード権が存在し、GWに開催されるⅠ部リーグ４位以上が条件である。このシード権を得ると、組合せ抽選において上位４大学は別のトーナメントブロックに入ることになり、インカレ出場を決めるまで対戦しない。インカレ予選を勝ち抜くためには、このシード権を取るかとらないかで大きく状況が変わってくる。理科大は2017年春季リーグ戦を３勝２敗と３位で終え、シード権を勝ち得た。しかし、油断は禁物である。2016年のインカレ予選では、Ⅲ部所属の日本大学生産工学部と対戦。その試合、理科大投手陣は不調。最終回まで打ち合いになり、負ける一歩手前のところまで追い込まれた。いくらシード権によってⅠ部５位以下としか当たらないとはいえ、何が起こるか分からないのがインカレ予選であると言える。

初戦：日本大学生物資源科学部

2017年インカレ予選組み合わせ抽選の結果、初戦が日本大学生物資源科学部に決まった。そして、同じトーナメントブロックにⅠ部のチームは入っていなかった。理科大にとって自分たちの実力をしっかり出せばインカレ出場権を得られる状況であった。しかし、去年の教訓を胸に、全員が１ミリの油断もない引き締まった状態で試合当日を迎えた。

理科大後攻で守備からのスタートとなった初回表、先発投手：大江が日大を三者凡退で試合の流れを早々に引き寄せる。初回裏の理科大の攻撃、先頭打者の勝山は「何とか先制点を、早い段階で取りたい」と考え、打席に入った。甘いボールを振り切った結果、先頭打者ホームラン。

とにかく明るい児玉主将、ホームラン直後の笑顔

引き寄せた流れをがっちりつかむべく、児玉もホームランを狙い、それを現実にする。初回裏、２本の柵越えホームラン他で一挙５点を先制した。集中と緊張、不安が入り混じったインカレ予選は最高の形でスタートできた。流れに乗った理科大は４回コールドで初戦をものにした。

2016年は守備からリズムを作ることが出来ず、攻撃でもボール球を打ち、チャンスをものにできず、なかなか流れを作ることが出来なかった。2017年は投手陣は丁寧にコーナーへ投げることで相手に思うような攻撃をさせず、打撃では守備からの流れにのる波状攻撃で一気に差を広げることが出来た。反省を活かしたゲーム展開であった。

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
日大生物資源	0	0	0	0				0
東京理科大学	5	4	0	1 ×				10

バッテリー：大江、石崎－塩谷
本塁打：勝山、児玉
二塁打：石崎、小山

インカレ出場決定戦：都留文科大学

初戦を突破した理科大はインカレ出場決定戦で、春季リーグ戦にてⅡ部昇格を決めて勢いづく都留文科大学と対戦することが決まった。

理科大後攻で始まった初回表の守備、先頭打者に四球を与え、チーム全体に緊張感と2016年の嫌な記憶がよみがえる。次打者を二塁ゴロに打たせ、４－６－３のダブルプレー。これで流れに乗るかと思われた。その気のゆるみが出てしまったのか、三番打者にホームランを浴び、１点を先制される。「やってしまった。このままでは負けるパターン」と先発投手：大江の鼓動は大きくなっていた。また、マネージャー渡辺も３年ぶりに入ったインカレ予選のベンチで、「やっぱり私は勝てないのかと考えていました」と当時の不安を話す。

２回裏の攻撃、石崎がヒット、尾形が四球を選び、チャンスを作る。そこで初戦先頭打者ホームランで勢いにのる勝山がタイムリー三塁打を放ち、２点を返し逆転。

このまま理科大ペースかと思われた３回表、四球で出した走者をきっちりとバントで送られ、ピンチを迎える。ライト前ヒットを打たれ、再び試合を振り出しに戻される。都留文科大学も自分たちのソフトボールを丁寧に行い、流れを簡単に渡してくれない。一進一退の攻防が続く３回裏、先頭打者の児玉が二塁打を放つと、続く関根の２ランホームランで、再び突き放す。

４回表、都留文科大の攻撃、ここで理科大は投手を大江から石崎に変える。「もう少し粘りたかった」と大江には反省の色が出ていた。石崎はヒットを許すも危なげないピッチングで守備から流れをぐいぐい引き寄せる。

４回裏、ここで理科大の猛攻が始まる。先頭打者の朝平が三塁線を抜けるランニングホームランを放つ。「まずは先頭打者として出ることを意識していた。結果的にランニングホームランを打てたのは良かった」と話す。その後、相手投手の不調を丁寧にものにする。四球をしっかり選んで満塁にしたあと、押し出し、尾形のライト前ヒットで勢いは最高潮となる。朝平再びの三塁打、勝山大活躍の二塁打で一挙８得点！

インカレ決定戦を４回コールドで勝利し、２年連続のインカレ出場を決めた。サヨナラ打を放った勝山は「あそこで決められて本当に良かった」と大活躍の裏に感じていた“負けられない”という重圧からの解放の瞬間であった。

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
都留文科大学	1	0	1	0				2
東京理科大学	0	2	2	8×				12

バッテリー：大江、石崎－塩谷
本塁打：関根、朝平(ランニング)
三塁打：勝山、朝平
二塁打：児玉

インカレ出場を決め胴上げされる柳田監督

インカレ出場を決めて一段落したものの、理科大の戦いは終わらない。インカレに出場をしたことは過去に何回もあるが、インカレ予選である関東学生選手権で優勝したことはまだなかった。ここで優勝してやろうと選手全員がまた勢いづく。

関東学生選手権優勝へ

準決勝の相手は春季リーグ戦で１－２と惜敗した国際武道大学。インカレ予選で再度対決することとなった。春季リーグ戦では初回に１点先制したきりで援護が出来ず、最終回に逆転され負けた。「打撃陣がいかに勝負所で１本出せるかがこの試合のキーになる」と試合前ミーティングで再度気を引き締めて試合に臨んだ。

理科大先攻の初回表、青柳がレフト前ヒットで塁に出る。続く関根がバックスクリーンにホームランを放ち、幸先よく２点を先制できた。その裏の守備、二死から四球を与えるが、四番をショートライナーに抑える。

２回表、理科大の攻撃。二死二塁のチャンスを迎えるも後続が倒れ、流れをつかみきれない。その裏、武大の攻撃を三者凡退に抑え、守備からリズムを作りあげる。そして３回表、理科大の攻撃。インカレ予選からバットを変えて、当たりに当たっている関根がヒットで出塁。次打者の児玉がバックスクリーンにホームランを放ち、その差を４点に広げ、流れを一気につかむ。３回裏の守備、２本のヒットを許すも、得点をさせない。つかんだ流れを離さないよう全員が歯を食いしばる。

ホームラン後、監督・選手とハイタッチを交わす関根

そして迎えた５回表。先頭打者の児玉が四球を選んで出塁。続く城川、小山の連打で２点を加える。その後、塩谷が死球、朝平が四球で出塁しチャンスは止まらない。ワイルドピッチ他で２点を加え、この回一挙４点を加える。

最終回に登板した安齋

５回裏、コールドゲーム成立まで２点の猶予をもった状態で投手を安齋に交代。四球を出しながらも０点に抑えた。「いつかピッチャーが自分だけになった時、すべての試合を投げぬかなければならない。インカレ予選の緊張感の中投げられたことは良い経験になった」と安齋から来年以降のチームの柱になるのだという気持ちがあふれていた。５回コールドで春季リーグ戦のリベンジを果たした。

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
東京理科大学	2	0	2	0	4			8
国際武道大学	0	0	0	0	0			0

バッテリー：大江、安齋ー塩谷
本塁打：関根、児玉

決勝に進んだ理科大は、インカレ予選初優勝をかけ、強豪：城西大学と対決した。

城西大のエース宮原は大学男子ソフトボール屈指の好投手。高い身体能力を生かし、両足がピッチャーサークルから出るほど飛んで投げこむ球速１２０km/hを超えるドロップは凄まじい威力である。

４年生である宮原とはこれまでもリーグ戦等で何度も対戦しており、ホームランを放った選手もいる。今年で引退する宮原を打ち崩してインカレに行こうと意気込み、決勝戦に臨んだ。

理科大後攻の初回表、二死から三番打者に二塁打を浴び、ピンチを迎えるも後続を抑え、得点を許さない。その裏の攻撃、先頭打者の朝平、青柳、関根が三者凡退と大学男子ソフトボール界屈指の好投手宮原に完全に抑え込まれる。２回表、城西大の攻撃、先頭打者にソロホームランを浴び、１点を先制される。

その後も流れをつかめないまま迎えた４回表、テンポよく二死を取るが、七番打者にヒット、八番打者にも三塁打を浴び、追加点を許してしまい流れを城西大に持っていかれる。

４回裏、理科大の攻撃、二死から三番の関根が二塁打を放ち、最大のチャンスで四番児玉を迎え、期待がかかる。しかし、惜しくもレフトフライに倒れ得点には至らない。

５回表、理科大は流れを変えようと投手を石崎から大江に交代したが、先頭打者に四球を与えてしまい、その後２ランホームランを浴びる。その差を４点に広げられ、城西大ベンチが湧きたつ。しかし、その裏の攻撃、先頭打者の五番石崎が二塁打でチャンスを作ると、八番の尾形がセンター前タイムリーヒットで１点を返し、理科大も意地を見せる。

二塁打を放ち仁王立ちの石崎

しかし、反撃もここまで。尻上がりにコントロールが冴えわたる宮原を前に６・７回は３人ずつ打ち取られ、ゲームセット。悲願であるインカレ予選初優勝とはならなかったが、インカレの舞台で勝つために何をすべきかを再確認できた試合だった。

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
城西大学	0	1	0	1	2	0	2	6
東京理科大学	0	0	0	0	1	0	0	1

バッテリー：石崎、大江ー塩谷
二塁打：関根、石崎

大会後、教員採用試験で忙しくなる大江は「今以上に空き時間を有効活用していかなければ、インカレでは活躍できない」と考え、時間の使い方を更に見直す必要性を感じたと話す。

試合後の集合写真

強豪との練習試合

高いレベルのソフトボールで自分たちがどこまで戦えるか、強豪との練習試合を通じて何が足りないかを見極めた。

早稲田大学戦

早稲田大学は2017年8月初旬に行われた東日本大学選手権で準優勝した強豪である。

４回裏に理科大先頭打者山形が出塁すると、続く勝山のタイムリーヒットで先制。流れを引き寄せたかに思えたが、次イニングで連続安打を浴び、すぐさま同点とされる。その後は投手石崎が粘り強い投球で得点を許さず７回まで終了した。急きょ、タイブレークの１イニングを追加し、理科大は投手を小山に変えてリズムを変えたが４点を取られる。攻撃ではあと一本が出ず敗北を喫した。

早稲田大学戦で先制のホームを踏む山形

第一試合

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	計
早稲田大学	0	0	0	0	1	0	0	4	5
東京理科大学	0	0	0	1	0	0	0	1	2

バッテリー：石崎、小山ー塩谷
二塁打：児玉

試合後、二試合目の準備を行う早稲田大学の選手たちが全員でグラウンド整備を行っていた。これを見ていた柳田先生は後日、理科大で行った練習試合で下級生しか整備を行っていなかったことに対して指摘をした。選手たちは格の違いを改めて感じた出来事だった。

中京大学戦

同日、東海地区の春季リーグ戦で全勝優勝と力のある中京大学とも試合を行った。

試合は初回に勝山の先制ホームランで先手を取るが、前試合の疲れもあり、先発の石崎が中京打線に捕まる。２回には２点、４回には３点と得点を重ねられ、苦しい展開となる。終盤に２点返すも、５回から登板した小山も踏ん張れず、結局、６回コールド負けを喫した。

第二試合

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
中京大学	0	2	0	3	0	5		10
東京理科大学	1	0	0	0	2	0		3

バッテリー：石崎、小山ー塩谷
二塁打：勝山
本塁打：勝山

ホンダエンジニアリング戦

日本代表が４人も所属する東日本リーグ所属ホンダエンジニアリングと練習試合の機会を貰い、大子遠征の最終日に茨城から栃木へ移動し試合を行った。

試合は一方的な展開となり惨敗。しかし、日本代表投手長井選手をはじめ、世界と戦うレベルのソフトボールを肌で感じ、理科大ソフト部の伸び代がまだまだあることを実感できた貴重な経験となった。

ホンダエンジニアリングとの練習試合

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
ホンダエンジニアリング	1	4	0	0	1	0	0	6
東京理科大学	0	0	0	0	0	0	0	0

バッテリー：大江、小山ー塩谷
二塁打：朝平
三塁打：児玉

白熱の岡山インカレ

2017年の開催地は岡山県新見市。理科大は飛行機と現地チャーターバスで移動。万全のコンディションでインカレ本戦に臨んだ。

初戦：福岡大学（九州地区代表）

インカレの初戦の相手は福岡大学。体育会系の大学として有名であり、インカレ出場をかけた九州インカレで優勝し、３年連続４２回目のインカレ出場を決めた強豪である。
福岡大学のエース多久島は長崎選抜チームの一員として参加する力のある投手である。

理科大後攻の初回表、先発投手石崎の制球が定まらない。福岡大にエラーも絡んで走者をためられ、先制のタイムリー二塁打を許してしまう。２回表には二塁打・死球で一二塁のチャンスを作られ、２点タイムリー二塁打を打たれて追加点を許す。試合序盤ではライズを上手く打たれ３点を失った。３回に入る前、投手石崎と捕手塩谷の話し合いで投球の軸をライズから、ドロップとチェンジアップに変えようと決め、３回以降は塩谷が石崎をうまくリードし、福岡大の追撃をとめた。

失点を重ね、流れを完全に持っていかれたように見えたが、理科大も負けてはいない。２回裏、「１打席目は思い切り振りきる」と決めて打席に立った児玉が追撃のソロホームランを放つ。３回裏、一死一二塁のチャンスで再び児玉が３点ホームランを放ち、逆転に成功する。
６回裏、一死二塁から青柳がライト前ヒットを放ち、二塁走者の児玉が本塁を狙うも、右翼手の好返球でタッチアウト。その後打者走者を捕手が二塁で刺し、ダブルプレー。追加点とはならなかった。

福岡大学とのインカレ初戦

１点リードで迎えた最終回。先頭打者にヒットから一死二三塁と逆転のチャンスを作られる。エース石崎がここでギアを上げる。力のこもったピッチングで四番・五番を連続三振で抑え、ゲームセット。2016年には果たせなかった「インカレ勝利」を強豪の福岡大学からもぎ取ることが出来た。

この試合をエース石崎はこう振り返る。「児玉の２本のホームランはもちろん誰が見ても記憶に残ってるだろうけど、一塁ゴロを捕った勝山さんが印象的だった。一塁ゴロ初めて捕ってくれた。本当にびっくりした。あの日の勝山さんは足が動いてた。」これは緊張する大一番のインカレ本戦で選手が成長している証拠ではないだろうか。

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
福岡大学	1	2	0	0	0	0	0	3
東京理科大学	0	1	3	0	0	0	0	4

バッテリー：石崎ー塩谷
本塁打：児玉（2）

二回戦：城西大学（関東地区代表）

二回戦の相手は同じ関東地区代表の城西大学である。インカレ予選のリベンジを果たすべく臨んだ一戦であった。

初回、城西大学の二番打者にホームランを浴び先制点を許す。

３回裏、四球とヒットが重なって無死満塁のピンチを迎える。相手打者は四番。その初球、緩いフライとなり、誰もが打ち取ったと思った打球は一塁手の頭を超える不運なヒットとなり、その間に２点を追加される。

４回表、理科大は関根の三塁手強襲のヒットで出塁。その後、青柳がライト前ヒットを重ね、二死一二塁のチャンスを作るが、続かず得点には至らなかった。

５回裏、流れを変えたい理科大はここで投手を石崎から大江にスイッチした。大江の状態は万全ではなかったが、５・６回を三者凡退で抑え、守備から流れを手繰り寄せる。しかし、５回以降、ギアを上げた宮原を前にチャンスはおろか、ヒットも出せず、そのまま０－３で悔しい敗北を喫した。

城西大学との一戦に臨む理科大

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	計
東京理科大学	0	0	0	0	0	0	0	0
城西大学	1	0	2	0	0	0	×	3

バッテリー：石崎、大江－塩谷
二塁打：大江

この試合で一番記憶に残ったプレーはなんといっても児玉のダイビングキャッチ。石崎もベンチで「児玉、成長したな。」と思ったそう。本人もびっくりのプレーだったようで、気づいたら自分が飛びついていて、左手に衝撃が走った。確認したらボールが入っていたと話す。

強烈ライナーをダイビングキャッチしチームを救った児玉

また、ヒットを打ってガッツポーズをするも怒られる場面もあった。怒られた本人に話を聞くと、「バットを短く持って打った執念のヒットだった。嬉しくてガッツポーズが出たが、ベンチに帰るとめちゃくちゃ怒られた。なにがなんだかわからなかった」と話す。

彼の打った打球は右中間に飛び、ベンチにいるメンバーには二塁打を彷彿させた。インカレ本戦で宿敵の宮原投手からヒットを打った本人は一塁ベース上で喜びあふれるガッツポーズ。「今の打球では二塁に行けただろう！」というお叱りに戸惑いを隠せなかったようだ。

インカレに出る喜びからインカレで勝つ喜びへとマインドチェンジする必要がある。日本一のロマンを求めて、インカレに出続けることは欠かせられないと感じた一コマであった。

３年連続のインカレ出場へ

2018年インカレに向け、最上級生が抜けて新チームで臨んだ2017年秋リーグは優勝という最高のスタートを切った。しかし、投手頼みの試合が多く、守備・打撃共にインカレで勝つレベルに達していないと全員が感じる結果となった。2017年冬～2018年春にかけて心身を鍛え上げ、３年連続のインカレ出場を目指す。